夕暮れ。金に染まる草野に、ひぐらしの鳴き声が響く頃。

「……っぁあ…♡、」

薄暗い社(やしろ)の中、衣擦れの音と、数人の荒い息づかいが響く。

「堪忍(かんにん)……、もう堪忍してください……、」

布団の上の少年は消え入るような声を漏らしながら、はだけた白衣(びゃくえ)からのぞく薄い胸を反らした。

「いいや。まだまだだ。これはお前を立派な供物(くもつ)にするための修行だと言っているだろう」

「ぁあ…っっ！♡♡」

少年に覆い被さるように屈みこんでいた男が、不意に腰を突き出す。

赤黒い雄茎が、少年の濡れそぼった孔を再度犯す。図太い肉茎に貫かれた内壁が反射的に蠢動(しゅんどう)し、少年を淫らな疼きで苛む。強い快感に仰(あお)のけば、高い位置にあるご神体が逆さまに目に入った。

小屋のように狭い堂内に明かりは無く、障子から入ってくる夕陽も徐々に暗くな

り始めていた。まだ西側の連子格子からは橙色の光が入ってくるが、それが少年の目には外と自分とを隔てる檻のように見えてならない。

「ほら、また前が勃ってきているぞ。この村の巫男たる者、どんなときでも心を泉のように鎮めていなくてはなぁ？」

少年のなかに雄を突き入れたままの男が、悪戯でもするように少年の幼茎をつつく。

「やはりまだまだ修行が足りないということだろう」

「教えでは七日七晩だが、もしかしたらそれ以上にこの儀式が必要かもしれんなぁ」

少年を取り囲んでいた男たちは口々に言い、下卑た笑みを隠そうともしない。

少年がこの村に代々伝わる神事の巫男に任命されたのは、たった三日前のことだ。村長の爺の言葉に少年がはいともいいえとも答えぬうちに、その細い躰に白衣と緋袴を着せられ、首と手首と足首に朱い麻紐を括り付けられてしまった。麻紐には小さな鈴が結びつけられており、少年が動くたびちりちりと鳴る。伝統的な覡の装飾とのことだったが、要は少年が逃げ出さないために誂えた体の

いい枷だ。少しでも動けば鈴が鳴るので、人に気づかれずこの社(やしろ)を出ることや、まして村から抜け出すことなど絶対にできない。

「ほら。もっともっと修行して、神様に恥じない立派な巫男になろうな」

「っあ、ぁあ……♡、」

男は少年の太腿を抱え上げ、立て続けに腰を深めてくる。太い幹のような雄茎が、何かの刑罰のように少年の隘路(あいろ)を押し拡げ奥を穿(うが)った。

巫男の役割は、神への供物となること。
供物に相応しい巫男になるには、七日七晩、修行と称した『清めの儀』を行わなければならない。どんなことがあっても神の前に平静で、清らかな心でいること。そうなるための儀式として、巫男は村の男たちに代わるがわる犯され、その身と心を鍛えなければならなかった。

「おらっ」

男にまた腰を深められ、ちり、と鈴が鳴る。

「ぃや…、ぃや…ぁ……、堪忍……、もう堪忍してください…、」

大きな目をぎゅっと閉じれば、幾粒もの雫(しずく)が絹のような頬を滑りおちる。
三日前から男たちの肉茎を受け入れ続けた孔はその入り口を卑猥に色づかせ、ぬらぬらと僅かな光を照り返している。男の赤黒く太い幹はそこを容赦なく押し拡げ、ゆるゆると抜き差しを繰り返した。孔内の滑(ぬめ)りを借りて、少年の身にはあまりにも大きい幹が易々(やすやす)と行き来する。

「ぁ…、ぁあ…っ♡、ぁ……、ぅあ……っっ♡♡、」

男たちの精と自らの孔液に濡れそぼつなかは、もう初日のような痛みを感じてはいない。しかしそれとは別の、もっと厄介な感覚が少年を苛(さいな)んでいた。

内壁は擦り上げられるたび淫らにひくつき、少年の意思とは無関係に男を奥へ誘(いざな)う。尻と太腿に無意識に力が入り、懸命に男のものを咥え込もうと腰が揺れるのをとめられない。
こんな場所を乱暴とも言える形で犯されているにもかかわらず、得(え)も言われぬ気持ちよさを感じてしまっている自分がひどく汚れてしまった気がする。三日前に初めて男を受け入れたときはあまりの息苦しさと痛みに泣き狂ったが、もうその感覚すら思い出せない。

「ひぁ…♡、ぁあ……っ♡♡、も…だめ……♡、だめ…ぇ……♡♡♡、ぁあ…っ、や…も……、やめ……っ、」

紅潮した頬を濡らす涙。

袴はとうの昔に剥(は)ぎ取られ、無造作に床へ投げ捨てられている。

少年の願いは聞き入れられることなく、その甘い声色だけが村の男たちの欲望を益々(ますます)掻き立てていた。

「巫男なら俺の太魔羅(ふとまら)にも屈しないはずだっ。おらっ、もっと咥え込んで耐えて見せろっ」

「ぁあぁ……っっ♡♡♡♡、ぁ、ら…、だめ……っ♡、だめ……ぇ……っっ！」

徐々に烈(はげ)しさを増す男の抽送。男の幹と結合を強(し)いられた孔からは、ぐぽぐぽと卑猥な音があがりだす。太いそれが出たり入ったりするたびに、僅かな隙間から白濁した液がときおり泡立ちながら零れ落ち、綿(めん)の布団を汚していく。

こんなの耐えられるわけがない――。

「ぃ…、達(い)く…！♡も…、もう達(い)っちゃぃ…、ます……から…ぁ、♡…っぁあ……っっ♡♡♡♡、」

「『達く』だと？神聖なる神の御前で、巫男ともあろう者が…っ。赦されると思ってるのか？！」

「っひ…、ご…、ごめ……なさい…っ。し…、しません……っっ、」

「お前は耐(こら)え性がないからなぁ？この儀式に入ってもう何回粗相した？ん？言ってみろ」

耳元でねちっこく責め立てるように男は言う。
剛直の動きは緩められたが、その幹がこんどは焦れるような遅さで少年の内壁を奥へと擦り上げてきて、少年は堪らず身を大きく捩(よじ)らせた。

「ぅ…、っぁ……♡、わ…、わかりませ……、」

あまりの快感に喉がひくっと鳴る程少年は泣いていた。
開かされ続けている細い脚にはもう力など入らない。なのに突き入れられた幹を食い締めようと後孔が収縮するたび太腿の内側がこわばって、まるで快感に打ち震えるようにそこがわなないてしまう。

「自分の罪咎(つみとが)くらい覚えておけっ！七十三回だっ」

「ひぁあ″ぁ……ッッッ♡♡♡♡♡、」

ゆっくり挿れられていた幹を唐突にずんっと深く突き入れられ、背筋をびりびりと

した快感が突きあがる。頭のなかで何かが白く弾け、少年は図太い淫刀をこれでもかと言う程食い締めながら絶頂した。幼茎から白蜜が散り、白衣と薄い腹をまた濡らす。少年の腹は既に臍に蜜が溜まるほど、自らの液で濡れに濡れている。そこへまた熱い液を迸(ほとばし)らせ、少年は七十四回目の粗相を犯した。

「また神前で精を漏らしたな？」

快感の余韻に全身をがくがくと震わせている少年。脈打ち痙攣する孔の奥で男は剛直を弾けさせ、叩きつけるような熱い奔流で少年を犯す。まるで粗相をしたことに対する罰であるかのように、どろりとした精は少年のなかを腹が苦しくなるほど存分に満たす。

「こんな淫乱な巫男には特別な修行が必要だな」

「このままじゃぁ氏神様へのお努めなんて無理じゃ、無理」

「またあれをやるしかないの」

男たちが口々に言うのが耳に入るのと同時に男がずるりと淫刀を抜き去り、少年はびくっと痩身を跳ねさせた。少年の可憐さに似合わぬごぷ、と下品な音が響き、窄まりから粘度の高い白濁があふれ出してくる。

「ぁ…、ぁれは…、お…、お願いです……。あれだけは堪忍してください……、」

「いいや、駄目だ。お前のような出来損ないの巫男には、厳しい躾が必要だからな」

少年のか細い訴えには耳を貸さず、男たちは休ませなどしないとでも言うように少年の躰を布団から起こす。今すぐここから逃げ出したいのに、連続で何度も躰を嬲(なぶ)られ続けた少年には立ち上がる体力さえ残っていなかった。男たちにされるがまま、まるで人形のように躰を預けてしまう。

「……ぁ…♡ぁ……、」

成す術も無く、少年は先程とは別の男の胡坐(あぐら)の上に座らされる。
男は日に焼け、大きな体躯をしていた。その筋肉質な胸や脚の中で、少年の姿はあまりにも儚げだ。肌の白さ、か細さが一層際立つようだった。

「さあ、巫男ならば教えた祈祷を頭からしっかり唱えてみせい」

「ぅあ…っ♡、」

後ろから耳元で囁かれ、両太腿を抱え上げられる。一糸をも纏わぬ下半身が開

け広げになり、その場の全員に恥部を曝け出すような体勢に何度目かもわからぬ恥辱が込み上げた。少年はそれでも新たな罰を下されるのがこわくて、命じられたとおり祈祷の詠唱をするため震える唇をひらいた。

「か…、掛(か)けまくも…、畏(かしこ)き……、ぁ♡、ぁあ……っ♡、」

最初の文言も言い終わらぬうち、少年の躰はゆっくりと男のそそり立った太い幹の上に降ろされはじめる。ぐずぐずに濡れそぼつ孔がまた熱い肉に押し拡げられていく。

「どうした、さっさと続けんか」

「……っぁ…♡、ゆ…、夢山(ゆめやま)の…、大神(おおかみ)……、山吹(やまぶき)の陰(かげ)に……、ぅ♡、…っあ…！♡♡♡」

男と少年を見下ろしていた村人の一人が、少年の前に屈み幼茎を掴みあげてくる。先程精を吐き出したばかりのそこを太い指で軽く摘ままれ、くにくにと揉まれれば堪らない刺激が下腹を犯す。

「ひ…、ぁ……っ♡♡♡♡、」

「どうした？早(はよ)う唱えよ」

意地悪く耳元で低く囁かれると同時に、ずぷ、と根元まで男根を咥え込まされ、少年は全身をびくんっと跳ねさせた。男たちに注がれた精でぐずぐずに蕩けた内壁は、飽きもせずまた男に絡みつく。その上この体勢は自重が尻に集中して、男根が深く孔に埋め込まれるのでつらい。昨日も一昨日もこれをされたが、数ある嬲られ方の中でこの体勢がもっとも酷く少年を苛んだ。それを知りながら、男たちはわざと少年に無理を強いるのだ。

「……っ東の♡、海に…、御禊(みそぎ)……祓(はらえ)…ぁ♡、ぁあ……っ♡♡♡、ぁあぁ……っっ！♡♡♡♡」

少年の幼い茎を弄っていた男の指が、今度は上下に擦り上げるように動き出す。思わずずっぷりと埋め込まれている後ろの肉棒をきゅうっときつく締め付けてしまい、後孔から痺れるような快感が臓腑を駆け上がった。

「巫男(みこ)ともあろう者が、何腰を揺らしているんだ？けしからん奴め。こうしてくれるわ」

「ぁあ……っっ！♡♡♡♡♡」